



センター所長のご挨拶

ニュース二〇一九!

浅岡靖史

二〇一九年、児童文化研究センターではニュースが目白押しです。早速、順にお伝えいたしましたしように。

I 『研究論文集22』過去最多ページ数に

三月に発行された論文集が、投稿者ならびに寄稿者の皆様方のおかげで、総ページ数二六六と、過去最多となりました。三年前、わずか三六ページだったことを思うと、感慨無量です。

II 研究助手、交代

これまで長く、研究助手としてセンター業務を支えて下さってきた、金子真奈美さんと高原佳江さんが、三月末にご退職され、かわって四月一日から、宇佐美奈麻子さんと遠藤知恵子さんが新たに研究助手に着任されました。どうかよろしくお願ひします。

III 二つの新プロジェクト始動

『論文集』と並ぶ、研究活動の柱であるプロジェクトに、この五月から、「SF・ファンタジー小説の研究と創作」、「ちりめん本研究」という二つが新たに加わりました。これでプロジェクトは全部で七つになりました。

IV 日本児童文学学会研究大会、開催

本年十一月二三日(土)・二四日(日)の二日間、白百合女子大学としては一九九〇年以来二九年ぶりに、同学会の研究大会をお引き受けしました。児童文化研究センターが実行委員会事務局を務めます。井辻朱美先生のご講演をはじめ、魅力的な企画満載の大会です。どうぞ奮ってご参加下さい。

(所長)

センター主催研究会報告

二〇一八年度は、第六〇回・第六二回研究会を開催いたしました。ご参加、ご協力いただきました皆様、誠にありがとうございました。

以下に、各研究会の概要と、センター構成員による研究会報告を掲載いたします。

第六〇回研究会 澤田精一氏講演会

講演者 澤田精一氏(絵本研究者)
題目 光吉夏弥―その生涯と時代
日時 二〇一八年六月二十三日(土)
十四時〜十六時
会場 白百合女子大学 九〇二二教室
挨拶 浅岡靖史氏(本学教授)
司会 八代華子氏(本学助教)

積み重ねること―澤田精一氏講演 会に参加して

佐々木裕里子

戦後の日本に海外の絵本、子どもの本を数多く紹介した故光吉夏弥氏(一九〇四―一九八九)の業績は説明するまでもないだろう。しかし光吉氏は生前、エッセイのような自身のことを語る機会を持たず、また日記の類も残さなかったこともあり、子どもの本にかかわる前に舞踏や写真の評論を書いてきたことは知られていても、そこからどのようにして子どもの本にかかわることになったのかなど、その背景には不明な点が多い。そこに迫ろうとしたのが、光吉氏を最後に担当した編集者、澤田精一氏による本講演である。

これまで私は、澤田氏が光吉氏に関する資料を収集されていることや、そこから得られた新情報を聞かせていただくことがあった。光吉夏弥の仕事がひとつひとつ明らかになっていく過程はとてもエキサイティングなものであったが、内輪の話に留まることをもつたのではないかと感じていた。澤田氏が多くの時間をかけて古書店や時にはウェブ上のオークションサイトまでも活用しながら、光吉氏がかかわった出版物、執筆、翻訳した資料をひとつひとつ丹念に収集されておられたという、その並々ならぬ努力を存じていたからこそ、今回まとまった形で多くの人ともにお話が伺えたことを嬉しく思っている。ちなみにこの資料収集への熱意は、お知り合いから愛情を込めて「探偵」と称されるほどである。

講演では、戦前に光吉氏が大学を出てから、どの

ような仕事をされていたのか、数々の資料を提示しながら紹介して下さった。それは、直接的に子どももの本につながるものではないが、これまで知られてこなかった光吉夏弥の一面を明らかにしたことから、この講演が果たした意義は大変に大きいといえるだろう。これから先も澤田「探偵」が光吉氏に迫り、新たな事実を明らかにして下さることを楽しみに待ちたいと思う。

なお本講演の講演録は『白百合女子大学児童文化研究センター研究論文集22号』（二〇一九年三月発行）に数々の図版とともに掲載されているので、詳細はぜひそちらを「一読いただきたい。」〔本学非常勤講師・研究員〕

第六二回研究会 ハンス・ライエルク・ウター氏講演会

講演者 ハンス・ライエルク・ウター氏（口承文芸研究者）

題目 ラプンツェルのすがた

Ⅰ「ラプンツェル」メルヒェンの解釈
と意味Ⅰ

日時 二〇一八年十月二日（火）

十六時二〇分〜十七時五〇分

会場 白百合女子大学 一三〇八教室

挨拶・通訳 間宮史子氏（本学教授）

司会 八代華子氏（本学助教）

ハンス・ライエルク・ウター先生の講演 会に参加して

南口菜々

二〇一八年十月二日、ドイツの著名な口承文芸研究者であるハンス・ライエルク・ウター先生が来日され、講演会が行われました。

今回、先生はラプンツェルメルヒェンについてのお話をしてくださりました。お話は『ラプンツェル』メルヒェンの初期のかたちから始まり、「題材・モチーフ・解釈」、「口承における『ラプンツェル』メルヒェン」、「絵による造形」と大きく四つの側面から語られました。

私は昔話を題材とした文学作品の挿絵がどのように表現されているのか、という点に興味を持っていたので、「絵による造形」のお話が強く印象に残っています。先生は、ごく初期の挿絵から風刺漫画に至るまで、多くの図像を取り上げ、解説してくださいました。そのお話の中でも、特に注目されていたのが、挿絵の重要性です。挿絵がなぜ重要なのか。先生は、「そのメルヒェンが特に人気のあった時期がいつか、ということの指標」になる点、「挿絵画家たちが話の転換点やクライマックスを絵でとらえようとするため、その絵でこの時代のメルヒェンの意味と解釈について知ることができる」点を挙げられました。では、実際ラプンツェルの挿絵はどう描かれているのか。大抵のラプンツェルメルヒェンの挿絵にとって中心をなすのは、女魔法使い、または魔女の姿です。一九世紀では、しばしば、女魔法使いまたは魔女は、型にはまった否定的な醜い姿で描かれました。しかし、二〇世紀になるとあまり描かれなくなり、前面に出

るのはラプンツェルと王子との出会いです。先生は「このメルヒェンの意味と解釈がより肯定的な観点、囚われからの解放と恋人たちの結合に向けられ、敵対者が背景に退かされたことが推測できる」と示されました。

時代やメディアごとに様々な「すがた」を見せるラプンツェル。その解釈と意味を改めて考えさせられるご講演でした。

こちらに書くことができたのはほんの一部に過ぎません。質疑応答を含むひとつひとつのお話がとても充実していて興味深く、楽しく、刺激的な時間でした。このような機会を与えてくださった皆様に感謝しています。ありがとうございました。

〔准研究員〕

センター構成員活動紹介

教員となつて問われたこと

伊藤かおり

白百合女子大学博士課程を満期退学して一一年、大阪の帝塚山学院大学に職を得て早くも六年が過ぎました。在学中は近代日本児童文学を専門に、宮沢賢治先生のご指導の下研究を進めてまいりました。今も泉鏡花やその周辺の作家の子ども関連の作品を研究対象とする傍ら、近現代児童詩歌研究プロジェクトでは大正時代の童謡の研究も進めています。さらに、帝塚山学院に縁の作家・庄野英二も私の研究対象に加わりました。庄野作品に関しては現在では手に入る本も少なくなっており、この貴

重な遺産を後世に伝えるのも私の使命だと思っております。

専任教員として勤務し、私は学生に教育者としての自分を育てられてきました。場合によっては学生の大学生活におけるあらゆる面に関与します。受け持ちの学生が欠席がちになれば保護者と連絡を取ることもあります。

また、生活習慣やマナーもその都度指導をしなければなりません。人間としての軸をしっかりと保たなければ指導はできない。常に自分を試されるような現場です。

まだ長いとは言えない教員生活ですが、学生の気質も変化してきたように感じます。本を読まない学生というのは以前から取り沙汰されていましたが、今は〈物語〉に触れない学生が多くなっているというのが私の実感です。本はおろか、マンガも読まず、アニメやドラマ、映画のような映像作品さえ観ない。インターネットの動画は見るが、それらは短く、起承転結のある物語というには程遠い。そのことは一般的な文章の読み書きに加えて論理的な思考能力にも影響を及ぼしていると感じます。

現在、大学の文系分野を取り巻く環境は厳しくなっています。文学分野の学科は縮小傾向にあり、当然のことながら児童文学研究の環境も厳しさを増しています。なぜ児童文学を学ぶのか、それが社会に何の役に立つのかを問われます。ましてや、それを大学生が学ぶ／大学生に教える意義とは何なのか。ここ数年、私自身も児童文学の意義や理念に関する再考が求められてきました。幸いにも、授業の関連で児童文学作家の方とお話をする機会を数多く持つことができました。その方は「児童文学とは向日性の文学、人生を肯定する文学だと考えて作品を生み出している」とおっしゃっていました。それでは、研究者の末席に連なる者として、教育に携わる者としての私にとって、児童文学とは何なのか。児童文学と

は〈物語〉の基本であり、人生を、あるいは人間を肯定するものである。十分ではありませんが、それが私の考えです。また再考を促される状況が来るかもしれません。今は児童文学が学生たちの人生の指針になるかもしれないとの思いで日々を過ごしています。〔研究員〕

とりとめなく、ただ、わくわくと

椀村裕子

博士課程を単位取得退学してから、気がつけばそれなりの年月が経っていました。とりとめもなく、その折々に興味をもった課題に取り組みながら、白百合での児童文化の学びが広範囲にわたっていたこと、また子どもというものが多種多様な文化に触れながら成長するものであることを実感しているところです。

卒業論文以降、日本の昔話のなかで樹木がどのように語られているのかに興味を持ち続けています。昔話のなかでは、多くの動物が主人公となり、また主人公と交流したりしており、それら人間と動物の関係から自然観を探るという研究で大きな成果があげられてきました。しかし、物言わぬ樹木や花、一本の蔓草が昔話のなかで語られるときにも、何らかの自然観が現れているのではないだろうか、そんな興味から始まったことでした。やがて海から流れ来る「寄木」と、その漂い来たるおおもとにある「海」、あるいは日本以外の昔話ではどうなのかなにも興味はひろがります。

現在取り組んでいる仕事は、主に教育の現場へ向かう学生に児童文化を教えることです。保育者を目指す学生が多いので、わらべうたや絵本、児童文学からストーリーテリング、読書指導まで、児童文化専攻で学んだこと

を総動員させる日々です。そして、教育の視点からみる児童文化と、文化としてみる児童文化の違いに葛藤する毎日です。学生たちと話をしていると、絵本は好きでも、児童文学や昔話を知らない人が多いことに気がつきます。これからは日本でも多文化社会のなかで保育・教育することになります。若い人たちには、昔話を通してそれぞれの国の文化を尊重することを学び、また子どもたちに伝えて欲しいと願っています。

研究面では、スウェーデンの昔話と児童文学、ちりめん本、そして作文集の分析にも興味を抱き、少しずつ勉強をすすめています。これらの研究を始めたきっかけのひとつは、白百合での勉強のなかで、心にひっかかっていたものから。ふたつめは、『瀬田貞二 子どもの本評論集』（福音館書店）の編集に関わらせていただいたときに、児童文化を幅広く見渡す必要性を教えられたから。そして、みつめは人との出逢いから。例えば、昨年より各地を巡回している「長くつ下のピッピの世界展」で図録のお手伝いをさせていただきましたが、そもそもスウェーデン語の勉強をはじめたのは、今回監修を勤められた菱木晃子先生とのしあわせな出会いがあったからでした。（翻訳では院の後輩の岸野あき恵さんにもお手伝いいただきました。これも出合いに感謝です。）

研究を通して知り合うことのできた方々と語らううちに、知りたいことや書きたいことが現れてきて、気がつけば〈広く浅く〉の状態です。児童文化の研究をする者としては、はなはだ浮草のような有様ですが、子どものように目の前の美しいものに夢中になる気持ちも大切にしたいと思うのです。〔本学非常勤講師・研究員〕



留学生日本滞在記

オープンマインド
「開明」との同行

荻博函

こんにちは、博士課程(前期)一年生、中国出身のゴウハクカンです。外国人しかも男子であり、女子大学では異質者の中の異質者かもしれません。よく周りの皆は「ゴウ君は特異視されてはいないはず」と励ましてくれますが、入学してから二ヶ月も経過したのになお正門で警備員さんに「学生証の提示をお願いします」と度々要求される自分は、周りの人との違いを意識しようとしなくとも、自ずから感じてしまいます。しかしながら、この周りの人間と違って自分の自分を自然に受け入れてくれる皆さんも、開明な精神を持つ方々だと思います。中国では、児童文学というジャンルは発達していない分、子供に大人の読むものを読ませるのが一般的でした。審査により子供によくないと思われる部分は削除されますが、これでは大人の価値観と見るものを子供に押し付けることと同じではないかという考え方もできます。実際、現在どの東アジアの国々にも見られる現象ですが、若者のメディア・リテラシーの欠如や、自分と異なるものへの攻撃性などの現象も、恐らく大人の教育の偏狭さとも無関係ではないでしょう。これは教育者の「開明さ」が足りないからではないかと、いつも考えています。

しかし、理屈だけでは分からないのはまた人間であり、むしろだからこそ理屈を理解する、「これまでの自分が知っているものと違う」経験と知識が必要です。ただし、新し

い視点を手に入れるため自分を積極的に改変するだけでなく、人間の有限な命が授けた、ありのままの自分を再認識し、そこからもう一度日常の世界を「見る」ことで、「開明さ」を手に入れることも大事だと思います。それは、「研究」という行動の一つの解釈とも考えられます。どの国にいてもこれは常識的な考えかもしれませんが、自分の専門領域に閉じこもり、精神が保守化する研究者も、必ず存在すると思います。前轍を踏まないよう、また、いつか成長して後輩を導く先輩になっても、自分が他人の創造性に害をなさないことを祈ります。(博士課程(前期)一年)



科研費作業終了報告

二〇一六年度より三年計画で行ってきた光吉夏弥所蔵資料の公開に向けた整備が、昨年度、終了いたしました。これは平成二十八年科学費助成事業(学術研究助成基金助成金)の交付を受けた作業です。センター客員所員の神宮輝夫先生、龍谷大学短期大学部准教授・センター客員研究員の生駒幸子先生をはじめ、多くの方々にご助言・ご協力いただきました。心より御礼を申し上げます。今号は、担当者として整備作業の実務を受け持った元センター助手で本学非常勤講師の金子真奈美先生と、実際に作業を行ったセンター構成員の浜名那奈氏にご寄稿いただきました。

◆金子真奈美

平成二十八年度から平成三十年度にかけて、科学研究費助成事業による基盤研究の作業管理に当たらせていた

いただきました。白井澄子教授による当該研究では、故光吉夏弥氏が作成した「情報カード」を公開すべく、整備・データ化したしました。

光吉氏が日本に紹介し、今なお版を重ねている数々の絵本のいわばindexともいえる「情報カード」の総数はじつに約四万六千枚で、多くのカードには複数の書籍情報が記されています。その途方もない数の情報は、きれいに整理されたうえで印字されています。そのような資料に触れることで、研究における整理術の重要性を終始学ばせて頂きました。「情報カード」には、作家の名前の読みかたなどがメモ書きされたものも多数あり、光吉氏がひとつひとつの情報を書き下すのに、大切に集積なさったことが伺えます。こうして丹念に、世界中に幅広く目を配って作成されたひとつの「児童文学文化体系」には、当時の時代や文化だけでなく、光吉氏のオリジナリティーも随所に表れています。様々な光を発するこの集積情報が、公開されることにより、数多くの新たな研究の母体となっていくことを楽しみにしています。(本学非常勤講師・研究員)

◆浜名那奈

年度の後半から参加し、スキャンされた情報カードの画像をデータベースソフトに貼り付け、カードに記載された作品と光吉文庫の蔵書とを紐づける作業を行いました。

光吉先生のお仕事はこちらの視野を広げてくださるもので、長い間研究から離れてしまっていたこの身でさえ、研究者としての情熱をかき立てられるものでした。

途中参加でしたので、過去に遡って引き継ぎノートを参照したのですが、そこでは作業者一人ひとりが問題点を指摘し、的確な意見を述べていました。光吉文庫の利用者が、いかに効率よくデータにアクセスできるか。そのため、いかに正確なデータベースを作り上げるか。

全員が一丸となってそれらに向かっているのが感じられました。そして、センター助手（当時）の金子さんは、皆の意見を丁寧に吸い上げてそれを活かし、作業中に疑問点が生じた際には、迅速に判断してくださいました。すばらしいチームの一員として作業の一端を担わせていただいたことに深く感謝し、完成したデータベースを一人でも多くの方に活用していただけるよう、願っております。

〔研究員〕



プロジェクト活動報告

児童文化研究センターは、センター構成員による研究の促進を目指し、プロジェクト制度を設けています。二〇一九年度は、次の七つのプロジェクトが活動しています。

小波日記研究会（小波日記を読む）

（研究代表 猪狩友二）

巖谷小波日記（センター所蔵資料）の翻刻・研究を継続しています。二〇一八年度は、明治三十八年の日記・手帳を読み進め、また三十八年一月〜四月の翻刻と注釈を「児童文化研究センター論文集」に発表しました。さらに新しい仕事として、巖谷家所蔵の写真資料の整理も行いました。尾崎紅葉や硯友社メンバーの写真をはじめ、明治から昭和に至る貴重な写真の数々に、小波の生

涯の意味深さを改めて感じた次第です。二〇一九年度も引き続き、およそ月一回のペースで研究会を催し、明治三十九年の日記を読んで参りたいと思います。

近現代児童詩歌研究

（研究代表 宮澤賢治）

本プロジェクトの活動成果をまとめた『児童詩歌』は、十五号となりました。第一号から続く「賢治と童謡」も十五回目の連載となり、今回は天の子どもと異界の子どもの発声が、賢治作品の原点にあると論じています。「相馬御風の童謡」（二）は、「おとぎの世界」「金の星」「童話」の作品に反映されている御風の理念について説明しています。「中川ひろたかの「あそびうた」研究」（四）は、『とんぼ・ピーマンのカレンダーソング』の作品考察と、保育における行事の役割と音楽教育に対する中川の立場を確認しています。今年度も近現代児童詩歌への、細く長い研究活動を続けていきたいと思えます。

紙芝居研究

（研究代表 浅岡靖史）

昨年度は第一期紙芝居研究プロジェクトの最終年度でした。月例研究会では、『紙芝居研究』創刊号合評、かこさとしさん追悼の紙芝居実演、「紙芝居サミット」に参加するメンバーの基調講演及び実演の事前検討ならび

にその報告等、多彩な内容が繰り広げられました。同時に各メンバーは個人研究を進め、『紙芝居研究』第二号にその成果を発表しました。

そして今年度、第二期プロジェクトのスタートです。紙芝居と絵本の比較、紙芝居実演論、海外における紙芝居研究の動向、初期紙芝居の歴史等、メンバーそれぞれがさらに研究を深め、『紙芝居研究』第三号に発表する予定です。

ネオ・ファンタジー研究会

（研究代表 井辻朱美）

本プロジェクトでは、ネオ・ファンタジーに関連する論文・研究書の精読、研究発表、意見交換などを通して、ネオ・ファンタジー及び関連分野への理解を深め、新たなアプローチ方法を模索していきます。

これまでネオ・ファンタジーの起点ともされる「ハリ・ポッター」シリーズに関する研究書や日本のネオ・ファンタジーに関する論文などの精読、メンバーの関心に沿った研究発表などを行ってまいりました。

二〇一九年度はネオ・ファンタジーにおける映像について扱う予定ですが、具体的な作品などは参加メンバーの関心に合わせて決定します。

あまん・立原・安房作品研究

（研究代表 石井直人）

昨年度は、一昨年度に引き続き、安房直子作品に関す

る書評や論文等の研究資料を収集し、書誌情報のリスト化を行いました。また、作品名やキーワードから研究資料を検索するためのリストの作成も行いました。

今年度の目標は、白百合女子大学所蔵雑誌の中から最低一誌を選び、安房直子関連記事の網羅的収集・記事の書誌情報のリスト化・作品名やキーワード別の記事一覧の作成を行うことです。また、収集した資料を使用し、安房直子作品についての論文執筆も行いたいと考えています。

SF・ファンタジー小説の研究と創作

(研究代表 井辻朱美)

二〇一九年度新規の研究プロジェクトです。研究で得た知識を生かし、ファンタジー作品を創作します。児童文学研究も大切ですが、創作もこの分野への理解を深める手段となります。創作に意欲のあるメンバーが中心となって、みんなの興味に合うファンタジー作品(短編、長編、シリーズ)を精読し、意見交換、創作手法などの討論を通して、優れたファンタジー作品創作へのアプローチを模索していきます。

また、作品創作するための現地取材(年一〜二回ほど)を行う予定です。年ごとに、成果である短編あるいは長編作品(一〜二部ほど)を、児童文学コンクールに応募します。創作の困難さを実感するかもしれません。それはまさにこの研究プロジェクトの意味であると思います。将来的には、各メンバーの創作領域での活躍も企図しています。

ちりめん本研究

(研究代表 間宮史子)

本プロジェクトは、白百合女子大学図書館が所蔵するちりめん本の調査をとおし、明治一八年に長谷川武次郎が刊行を始めた、木版印刷による美しい挿絵と英語をはじめとする西洋のさまざまな言語による本文から成る和綴じ本——その後、特殊加工を施した独特の手触りの和紙を用いたため「ちりめん本」と呼ばれるようになった出版物——の魅力を探るために今年度から発足しました。昔話研究、挿絵／絵本研究、出版文化史研究、異文化交流史研究などさまざまな角度からのアプローチを試みる予定ですが、初年度は、この秋に白百合女子大学で開催される日本児童文学学会第五八回研究大会に向けて展示を行います。



センターからのお知らせ

宮澤賢治先生で退職

二〇一四年より、本学非常勤講師としてご助力くださいっていた宮澤賢治先生が、二〇一九年三月をもってご退職されました。いつも気さくな笑顔をありがとうございました。宮澤先生は四月以降も本センター客員所員を続けてくださいます。どうぞよろしく願いたします。

猪熊葉子先生で退職

一九九九年より本センター客員所員を務め、ご助力くださった猪熊葉子先生が、二〇一七年のご講演「旅だちの前にひとこと」をもってご退職されました。猪熊先生、ありがとうございました。

構成員研究発表会

児童文化研究センターでは、主催研究会のひとつとして、二〇二二年度から、「構成員研究発表会」を開催しています。この発表会では、児童文学専攻の博士課程(後期)に在籍する三年生を中心に研究発表をします。

詳細は児童文化研究センターホームページなどお知らせいたしますので、興味のある構成員の方はご参加ください。

センターブログ

児童文化研究センター公式サイト内のブログは、児童文化研究センターからのお知らせを掲載するとともに、構成員による研究報告や、本学大学院や児童文化研究センターの活動を紹介しています。

構成員の皆様には、積極的に投稿していただきたく存じます。投稿内容は、児童文学・文化関連の新刊書・映画・展覧会・講演会の感想・紹介、研究プロジェクトの活動紹介、日々の研究活動の様子、近況報告など、どんなことでも結構です。

ご興味のある構成員の方は、どうぞお気軽にセンターまでお問い合わせください。

ブログ：<http://ido-bun.blogspot.com/>

センター構成員一覧



(二〇一九年七月現在・敬称略)

委嘱研究員

木村八重子 竹田修

研究員

石元みさと 伊藤かおり 伊藤敬佑

尾崎るみ 金子真奈美

岸野あき恵 倉田恵理子

小林夏美 佐々木江利子

佐々木裕里子 沢崎友美 志村裕子

鈴木あゆみ 鈴木宏枝 鈴木律子

高原佳江

寺田綾 中川理恵子 永島憲江

浜名那奈 拾村裕子 宮崎麻子

山本麻里耶 林佳慧 和田啓子

准研究員

安達愛 黒川夏帆

南口菜々 政氏裕美

院生(博士課程(後期))

グラントウ、カトゥリーナ

孔阳新照 五井結基 西村明恵

沼本知自 半田涼太 深民麻衣佳

三池洋江 三井彩愛 山越夢子

劉冠玟 若谷苑子

院生(博士課程(前期))

阿部泉 今井奏恵 神永静香

敖博涵 高鷲榛奈 多田杏樹

中島菜穂 奈良田和華

所長

浅岡靖央

運営委員

浅岡靖央 石井直人 井辻朱美

白井澄子 間宮史子

森下みさ子 やたみほ

所員

浅岡靖央 猪狩友一 石井直人

井辻朱美 白井澄子 間宮史子

森下みさ子 やたみほ

客員所員

小澤俊夫 神宮輝夫

松井千恵 宮澤賢治

助手

八代華子 酒井志麻

宇佐美奈麻子 遠藤知恵子

客員研究員

生駒幸子 西村醇子

編集後記

「修士課程」・「博士課程」の名称が「博士課程(前期)」・「博士課程(後期)」に変更されました。時代の流れとともに研究環境も変化していきませんが、研究に対する情熱や、作品と作品を受け取る子どもたちに注ぐ愛情は、いつまでも変わらずに持ち続けたいと存じます。

今年度は十一月に日本児童文学学会研究大会を控えております。大会準備も含めた業務を通じて児童文学・児童文化研究者の皆様の研究・発表・交流の場として、ますますセンターの事業の充実を図ってまいります。今後ともご指導、ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

(八代・酒井・宇佐美・遠藤)

児童文化研究センター

夏期開室予定日

～8月5日(月)	9:00～17:00 (平常開室)
8月6日(火)～9月19日(木)	閉室
9月20日(金)～	9:00～17:00 (平常開室)



『白百合女子大学児童文化研究 センター研究論文集23』原稿募集

児童文化研究センターでは、児童文学・文化研究の活性化を目的として、年に一度、研究論文集（査読制）を発行しています。二〇一九年三月には、第二十二号を刊行し、投稿原稿の中から、七編の論文と一編の研究ノートを掲載しました。刊行された研究論文集は、児童文学・文化関連の研究者及び研究機関等に寄贈しています。研究成果を発表する場として研究論文集をぜひご利用ください。

つきましては、以下の要領で『白百合女子大学児童文化研究センター研究論文集23』（二〇二〇年三月発行予定）の原稿を募集いたします。ご投稿をお待ちしております。なお、採用された原稿は、本学学術機関リポジトリで公開の予定です。

締切

二〇一九年九月二十六日（木）正午必着

提出物

- ① 表紙（論文題目、氏名、構成員の身分、郵便番号、住所、メールアドレス、文字数、投稿区分（研究論文／研究ノート）、申告事項（あれば）を記載）
- ② 本文（参考文献、注、図、表等を含む）
- ③ 論文要旨（300字以内、論文題目を併記）
- ④ 欧文要旨（採用決定後、100words以内で提出。欧文題目を併記）

以上、①～③について、プリントアウト各一部及びデータを提出すること。

提出先

〒一八二一八五二五

東京都調布市緑ヶ丘一―二五

白百合女子大学 児童文化研究センター 宛

データの送付先

<endo@shirayuri.ac.jp>

研究論文集担当 遠藤知恵子

審査規定（センター規定より抜粋）

- * 研究論文集審査のための編集委員会を設置する。
- * 編集委員は所長が依頼した、本学専任教員またはそれに相当する者から構成される。
- * 投稿原稿は編集委員会の審査を経て、許可されたものが掲載される。

投稿規定

- 一、執筆者は原則として児童文化研究センター構成員とする。
- 二、児童文学・文化に関する研究論文、研究ノートを対象とする。
 - 【研究論文】先行研究に加えるべきオリジナリテイのある研究成果が明確に述べられているもの。
 - 【研究ノート】資料の紹介・精査、論点・仮説の予示、既存の仮説の検証作業、研究の中間報告等、優れた研究につながる可能性のある内容が明確に記述されているもの。
- 三、投稿に際して、審査を希望する投稿区分を明記する。ただし、審査結果によって、区分は変更されることがある。
- 四、表紙、本文、論文要旨、欧文要旨はマイクロソフト社のワードで提出する。

審査結果発表

二〇一九年十月中旬

注意事項

- a. 完成原稿を投稿する。
- b. 原則として、数字は、横書きの場合は半角英数字、縦書きの場合は漢数字を用いる。いずれの場合も半角カタカナを使用しない。
- c. 特殊記号、飾り文字、不必要なスペース等をなるべく使用しない。
- d. 図版を掲載する場合、引用要件を満たし、出所を明示する。
- e. 画像は鮮明なものを使用する。高度な印刷技術が必要とする場合は、実費自己負担となることもある。
- f. 学会等で口頭発表したものを投稿する場合は、その旨を本文末に記載する。
- g. やむなく投稿規定を逸脱する場合は、その旨を表紙に記載して申告する。その内容は編集委員会で審議される。
- h. 採用した原稿についての著者校正は初校、再校のみとする。著者校正での誤字脱字以外の加筆修正は原則として認めない。
- i. 不明な点については、研究論文集担当者に問い合わせの上確認する。